
えびふらい2

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えびふらい2

【Nコード】

N9957A

【作者名】

スグル

【あらすじ】

ヤマレンジャーの悪役で、最高に嫌われているエビフライ伯爵役の吉崎の受難劇。 完結編。

（前書き）

まさかの反響と、個人的な意図により続編として書かせて頂きました。技量が足りなく些末な点が目立っていますが、御了承ください。

.....

黒いマントを羽織ったタキシードのエビの顔をしたマスクをした男が、断崖絶壁で笑っている。

そして、その断崖絶壁の下には、赤、青、緑、黄、桃色の5人の全身スーツがいた。

「おのれ！！エビフライ伯爵め！！」
と、赤いスーツが叫ぶ。

これは子供向け番組の山登り戦隊 ヤマレンジャーの収録現場。

ヤマレンジャーは重厚すぎる内容と、アクションシーンで話題騒然である。

そして、登場人物の大半がイケメン君たち。

とにかく、この番組は大人気である。

遅れたが、僕の名前は吉崎孝則・・・。

25歳の独身・・・。

今、例の黒いマントを羽織ったタキシードのエビの顔をしたマスクを被ってる男をやっている・・・。

その名も、視聴者に最高に嫌われている悪の親玉のエビフライ伯爵・・・。

「あつははは！！私は、エビフライ伯爵だ！！」

オタキリ・シヨウさんのような俳優を目指して、この世界に入ったのに・・・。

いくら生活が厳しいとは言え、この役を・・・。

「カットー！！」

「お疲れ様でしたー」

収録が終わった。

最近、この番組の監督から褒められるようになっては来たが、心境は複雑だ・・・。

もしかして、僕の人生はこの先、ずっと・・・。

「お疲れ様です」

「ああ、お疲れー」

と、黒い全身スーツの青年が僕に声を掛けてくれた。僕に声を掛けたのは、エビフライ伯爵の部下で、数十人いるやられ役の黒い全身スーツの戦闘員役の篤元豪君。

「いやー、最近の吉崎さんの演技、すごいですねー」

と、彼も僕の最近の演技を評価してくれた。

しかし、正直嬉しくはない・・・。

エビフライ伯爵は、僕の仕事でありながら、苦悩にもなっている・・・。

そんな気持ちを、篤元君は知らない。

「なんか、吹っ切れたって感じですよー。なんか、あったんですか？」

「別に・・・」

彼はいい奴だが、僕の悲痛な所をピンポイントで突いてきて、ム力つく・・・。

・・・・・・

収録後に配給される弁当を僕は、スタジオの端っこの方で、篤元君と一緒に食べている・・・。

「エビフライ、上げますよ」

と、篤元君は弁当のエビフライを渡してきた。

「ありがとう・・・」

どこまで、無意識に傷に豆板醤を塗るんだこいつは・・・。

「そういや、明日はヒーローショーですねー」

「そうだね・・・」

彼の言うヒーローショーとは、首都圏最高峰のテーマパーク、カツ井遊園地の特設スタジオで行われる配役がそのままのショーである。

「みんな、今週の日曜はカツ井遊園地に来てくれよなー!!」

と言う感じで、ヤマレッド役の拓村君がテレビコマーシャルしてるイベントである。

しかし、僕にはこれほど辛い仕事はない・・・。

何故なら、この番組のファンの声を直に聞くからだ・・・。

・・・

あれは、初めてのショーの参加で・・・。

遊園地のスタジオのショーの最中に・・・。

「あつはは！私は、エビフライ伯しゃ・・・」

ベチャ！

ショーで演技の途中に、小さな子供からアイスクリームを投げ付けられたのだ・・・。

その日の夜、自宅の部屋で、体育座りで泣いた。

あんなに泣いたのは、中学生時代に好きだった女の子が、友達と歩いている時。たまたま、彼女の後ろを歩いていた僕が存在に気付かずに、僕のことを話していて・・・。

「あいつ、きもいよねー」

と、彼女本人が言ってたこと以来だ・・・。

これとは関係ないが、シヨーには出たくない・・・。

しかし、仕事だから仕方ない・・・。

一体、どこまで僕を苦しめるんだ、この役は・・・。

・・・

そして、僕はその感傷を背負いながら、自宅の帰路を歩く・・・。

「はあ・・・」

ため息をついても、どうしようもないが、少しぐらい、僕だって救われても・・・。

あつ・・・、今、僕が歩いている道は、こないだ暴漢に襲われていた女の子を助けた場所ではないか・・・。

あの娘と、いい感じになってたのに・・・。

・・・

僕は、暴漢から襲われていた女の子が、お礼ということで彼女の部屋まで、お茶に誘われた。

その娘の部屋には、ヤマレンジャーのポスターがあり、彼女がファンあると言ったことで、僕の役であるエビフライ伯爵について、聞いてみたら・・・。

「メチャクチャ、嫌いです」

この一言で、僕の恋が終わった・・・。

・・・

はっ！

そのことを、思い出したら、自然に涙が・・・。

畜生・・・、僕には、辛い思い出が多すぎる・・・。

・・・・・・・・

そして、当日・・・。

他の主演者は、タクシーで行ってるのに、僕は遊園地の一般客用のバスで遊園地に向かっている。

この差はなんだ・・・。

一般客に紛れて、椅子に腰掛ける僕・・・。

バスの中のお客さん達は、ヤマレンジャーショーの話で盛り上がっている。

子供たちだけではなく、女性のファンも多いようだ。

やはり、ヤマレッド役の拓村君のことで盛り上がっているようだ。

「エビフライ伯爵って、ムカつくよねー」

そんな声が、聞こえた・・・。

畜生、帰ってえ・・・。

さらに、もう一声。

「あの役、演じてる奴、絶対、キモ顔だよー」

そのキモ顔は、あなたと一緒にのバスに乗ってますよ。エビフライ伯爵が、マスクなのが、唯一の救いだ・・・。

・・・・・・・・

バスは、目的地の遊園地に着いた。
そして、バスを降り、遊園地に向かっていると・・・。

「あの・・・、もしかして・・・」

どこかで聞いたような黄色い声が、僕に向けられている。

その方向に、僕は振り返ると・・・。

「あっ・・・」

思わず、声を出して驚いた。

「やっぱり、あなたは、あの時の・・・」

こないだの女の子だ・・・。

何故、こんな所に居るんだよ・・・。

・・・・・・

とりあえず、ショーまで時間があるので、彼女と遊園地の喫茶店で話していた。

ちなみに、名前は、バレるといやなので、偽名を名乗った。

篤元豪君の名前を使わせてもらった。

許してくれ・・・。

彼女は、ヤマレンジャーファンと言うより、拓村君のファンの友達の付き合いで来ているそうだ。

その友達とは、寝坊して遅れているそうだ。

彼女の方も、この番組のファンなので着いてきて、僕に会ったとのことだ。

よく考えれば、運命的な出会いだと言いたいが、僕は嬉しいけど、嬉しくない・・・。

何故なら、彼女は、エビフライ伯爵が嫌いで、エビフライ伯爵は僕だからだ・・・。

自分を否定されてるのと同じだからだ・・・。
そんなわけだから、彼女と打ち解けられるわけがない・・・。

「あの時は、本当に嬉しかったです・・・」

と、彼女はこないだの暴漢から助けたことのお礼を言っている。
律儀な娘だ・・・。

それでいて、可愛い・・・。

本当に、こんな娘と付き合えたら、どんなに幸せなんだろうか・・・。

「いいえ、こちらこそ、お茶をご馳走になったので・・・」

そう言っておいた。

僕には、彼女の言葉に対応するしか出来ない・・・。

もう少し、話してみたいことがあるというのに・・・。

「そういえば、篤元さん。こないだ、なんで、エビフライ伯爵のことを聞いてきたのですか？」

核心を突くような彼女の一言が飛んだ。

「あっ、あのエビフライ伯爵のデザインしたの僕なんですよー」

頭が混乱したせいで、変な嘘が口から出た。

「そうなんですかー!？」

彼女は、驚いた。

驚く仕草も可愛い・・・。

しかし・・・。

「最近のエビフライ伯爵の演技、度が過ぎてますよね。なんというか、自分の鬱憤を晴らしてるみたいで・・・」

その一言は、僕の心を砕いた・・・。

心の中に、寒い風が吹いた・・・。

なんというか、この場で死ねるぐらいに落ち込んだ・・・。

それから、数秒して、彼女の友達が現れた。

そこから、先は普通に別れた・・・。

彼女は、また会えませんか？と言ってきたが、僕の耳には入らなかった。

だから、答えられなかった。

僕は逃げるように、舞台に走った・・・。

もう僕には、なにもない・・・。

まるで、僕の気持ちを表現するように、空が曇ってきた。

・・・

ショーが始まった・・・。

相変わらずに、エビフライ伯爵が出てくると罵声が聞こえる。

もはや、そんなことは、どうでもいい・・・。

会場から、彼女の姿が見える。

最前列で、エビフライ伯爵の僕を見ている・・・。

誰でもいいから、僕を殺して・・・。

急に、雨が降ってきた。

屋外の屋根がない場所のため、雨が足場を濡らす。

僕は、気持ちが緩み切っていた。

その時・・・。

！？

足が滑った。

雨で床が濡れていたからだ。

それで、大きく尻餅をついた。

その衝撃で、エビフライ伯爵のマスクが、僕の顔から外れた・・・。

ステージで、僕は自分を露出させてしまった・・・。

彼女に、僕の正体がバレた。

マスクが外れてしまった時、僕は彼女と目が合った。
もう完全に終わった・・・。

・・・

雨は、激しさを増したため、ショーは中止になった。

怪我はしなかったが、マスクが外れたことで、スタッフに大いに怒られた。

もう、なにもかもが、終わったのが解った。

・・・

今、僕は雨の遊園地のベンチで、一人泣いている。

なんで、こんなことになってしまったのだと。

昔からだ、いつも、自分の選択した道は外れるんだ・・・。

昔からだ、いつも、自分のは間違うしか出来ないんだ・・・。

昔からだ、いつも、自分は独りぼちだと・・・。

だから、こうして、下を向いて泣いている。

雨は、ずっと、僕の背中に突き刺さる。

全身、ずぶ濡れた。

雨は冷たい。

・・・！

妙だ・・・。

急に、雨が僕の背中に突き刺さらなくなった。

雨音は、激しさを増すばかりなのに・・・。

「駄目ですよ。世界征服が目的のエビフライ伯爵が、風邪を引いち

「や」

雨音から、声がした。

「・・・」

その声で、僕は顔を上げてみた。

すると、傘を持った人が僕の傍に居た。

傘が、僕から雨を弾いている。

そして、その傘を持っているのは・・・。

「まさか、あの時のヒーローが、エビフライ伯爵だったなんて・・・」

あの娘だった。

彼女が、僕に傘を・・・。

思わず、また声を上げて泣いてしまった。

嬉しかったのだ。

エビフライ伯爵が嫌いで、嘘を吐いてた僕の傍に、彼女が居ることに・・・。

雨が止むまで、僕は泣いていた。

雨が止むまで、彼女は、僕の傍に居てくれた。

・・・・・・

数カ月後・・・。

「わっはははは！ヤマレンジャーめ！私は、エビフライ伯爵だ！！わっはははは！」

と、スタジオの断崖絶壁で僕は笑っている。

今日は、ヤマレンジャーの最終回収録だ。

僕は、エビフライ伯爵での演技が気に入られ、次回作の悪役に抜擢された。

念願だったエビフライ伯爵との別れが来たと思ったのに・・。

しかし、エビフライ伯爵は幸せ者だ。

散々、みんなに嫌われていたのに、自分を理解してくれる人と出会い、結婚まで出来たのだから。

エビフライ伯爵は、本当に幸せ者だ。

そして、エビフライ伯爵は、僕自身だ。

・
・
・
・
・

（後書き）

些末な作品ですが、お読み頂きありがとうございます。これにて、「えびふらい」は終了となります。今後も、このように、皆様から支持をされる作品が書けるよう精進します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9957a/>

えびふらい2

2010年10月28日08時20分発行